英語の格標識に関する通時的・共時的研究（6）

——二重目的語構文の構造——

天　野　政千代

0. はじめに

これまでの稿で見たように，Larson (1988, 1990) をはじめ二項枝分かれ (binary-branching) 句構造に基づいた二重目的語構文と前置詞与格構文の分析には経験的証拠がなく，やはり三項枝分かれ (ternary branching) 句構造が不可欠のように思われる。そこで，本稿ではある限られた条件で，句構造に三項枝分かれも容認する立場から二重目的語構文と前置詞与格構文の構造について，Chomsky (1986a, b, 1991)，Chomsky & Lsanik (1991) などの原理・媒介変数アプローチを理論的背景として検討する。Chomsky (1992, 1994) などで論じられている最小主義プログラムも視野に入れているが，具体的な分析においては必ずしもそれに拘束されはしない[1)]。

1. 相対二項枝分かれ仮説

二項枝分かれを仮定する研究では動詞が取る要素が項 (argument) であるか付加詞 (adjunct) であるかを区別することなく，すべての要素に二項枝分かれを仮定している場合が多い。中でも，Larson (1988, 1990) は二項枝分かれと主題階層 (thematic hierarchy) とを連動させ，項と全く区別なく付加詞にも二項枝分かれを適用している[2)]。以下では，この主張を厳密二項枝分かれ仮説と呼ぶ。しかし，Jackendoff (1990) が指摘したように，実際には項と付加詞とを区別せずに，二項枝分かれを絶対的な制約として捉えようとすると，Larson の VP シェル構造がそうであるように大きな問題が出てくる。それならば，もともと項構造 (argument structure) には存在しない付加詞は無視して，二項枝分かれを主要部と項に限定しようという案が考えられる。項構造と句構造との間に密接な相互関係を認めた，Chomsky (1981) の投射原理 (projection principe) の精神からするならば，句構造の形式的特徴を定める時に，項構造に存在しない付加詞を無視することは，むしろ自然であろう。

例えば次の (1) の例においては，同種の付加詞が二つも現れているため，(2a) のように三項以上の枝分かれを認めるか，(2b) のように VP なら VP を繰り返して二項枝分かれを保持するしかない[3)]。

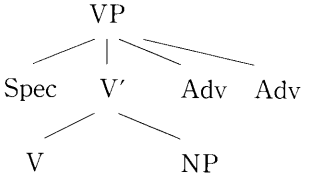
(1) a . Many peopel eat in restaurants in London.

[Quirk et al. 1985, p.519]

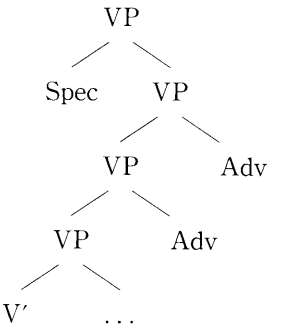
b . We'll meet tonight after the show.

[Quirk et al. 1985, p.533]

(2) a.



b.



ここでは，Zagona (1982) 以来多くの文献で論じられてきた VP 内主語仮説 (VP-internal subject hypothesis) を採用しているが，そこから生じる VP の枝分かれを別問題としても，場所や時の副詞が複数個生じると二項以上の枝分かれになる可能性がある。しかし，先に仮定したように，二項枝分かれという制約が副詞の生起による枝分かれには適用されないとすると，(2a) も二項枝分かれの反例にはならないことになる。あるいは，あくまでも二項枝分かれにこだわるならば，(2b) のように問題の副詞を VP に繰り返し的に付加すれば，同種の副詞が複数個現れても，文字どおり二項枝分かれになる。どちらが正しいのかをここで決定することはできないし，二項枝分かれの提唱者達にもそこは分からないであろう。

ただ，もしも (2b) が正しい構造であるとすると，上位の副詞と下位の副詞との統語的位置づけは同等ではなく，両者の間には何か言語学的に有意義な統語上の違いがあるかのような誤解を与える危険性がある。しかし，実際にはそのような違いはないように思われる。例えば (1a) の in London を，既知情報 (given information) となる解釈を比較的受けやすい here や there で置き換えると，in restaurants との語順を逆にすることができる[4]。

(3) Many people eat here in restaurants.

[Quirk et al. 1985, p.519]

この事実を重く見るならば，(1a) のD構造としては，二つの副詞が姉妹 (sister) として，同等の統語的位置にある (2a) の方が正しいであろうという結論になる。そうすると，問題はなぜ in restaurants が in London に通常は先行するのかということである。この二つの副詞の間に (2b) のような階層的違いがあれば，その線形順序は構造上の必然的帰結であり，何も特別な仮定をする必要がない。しかし，(3) の事実からすると，問題の線形語順は必ずしも強制的ではなく，逆にすることもできる緩やかなものである。そうすると，それの決定要因を別に求めなく

てはならず，その一つの有力な候補は，狭い場所を広い場所よりも先に述べていくという，Quirk et al. (1985) の言う論理的要請(logical requirement)であろう。線形順序が極めて強固である現代英語のような言語では，その決定要因の研究が特に重要な意味を持っており，階層関係がそれに寄与していることは間違いのない事実であろう。しかし，現代英語の線形順序がすべて要素間の階層関係によって決定されるのではないことも，また事実であろう[5)]。

厳密二項枝分かれ仮説に決定的な打撃を与えると思われるのが，人間言語の根本的特性と言われている次の例に見るような無限性(infiniteness)である。

(4) a. John is a handsome man.
　b. John is a dark, handsome man.
　c. John is a tall, dark, handsome man.
　d. John is a sensitive, tall, dark, handsome man.
　e. John is an intelligent, sensitive, tall, dark, handsome man.
　f. Etc.

(5) a. Debbie Harry is very attractive.
　b. Debbie Harry is very, very attractive.
　c. Debbie Harry is very, very, very attractive.
　d. Debbie Harry is very, very, very, very attractive.
　e. Debbie Harry is very, very, very, very, very attractive.
　f. Etc.

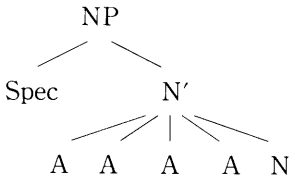
[(4)-(5): Radford 1981, p.19]

(6) b. I like the girl in jeans.
　b. I like the girl in jeans with long hair.
　c. I like the girl in jeans with long hair at the back of the room.
　d. I like the girl in jeans with long hair at the back of the room on the stage.
　e. Etc.

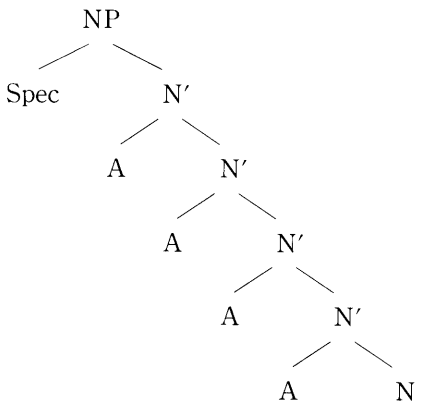
[Radford 1988, p.22]

言語運用上の制約があるので，言語の無限性には現実にはおのずと制限があるが，名詞前位形容詞 (prenominal adjective)，強調表現 (quantifying expression)，名詞後位前置詞句 (post-nominal prepositional phrase) の出現回数には理論的には制限がない。こうした例は多項枝分かれ (multiple branching) の必要性を示唆しているであろうし，厳密二項枝分かれ仮説にとっては無視することができない例であろう。(4)を具体例として取るなら，(7a,b)のような多項枝分かれと二項枝分かれ，のどちらがより正しいかという問題になってくるであろう。

(7) a.



b.



明確な判定基準はないであろうが，要はここに現れたすべての形容詞が同等の資格で主要部名詞を修飾している，という事実をどちらの構造がよりよく捉えているのかの問題である。(7a)はその事実を直接的に体現しているのに対し，(7b)では主要部名詞を最も下位の形容詞が修飾し，その結合体を一つ上位の形容詞が修飾し，さらにその結合体をもう一つ上の形容詞が修飾し，またさらに同様の修飾が行われていくと解釈される可能性が高い。(5)や(6)の例についても，同様の問題が生じてくるであろう[6]。

厳密二項枝分かれ仮説に対し，少なくとも付加詞をはじめとする非項については二項以上の枝分かれを許す案を相対枝分かれ仮説（relativized binary-branching hypothesis）と呼ぶことにする。以下では基本的にこの相対二項枝分かれ仮説に基づいて論を進めていくが，問題は項に対してはいかなる場合に二項制限を緩めて相対二項枝分かれを拡大していくかである。項については，原理的に要求されない限りは二項以上の枝分かれを認めない，というのが本論の方針である。

2．三項枝分かれと二重目的語構文

二項枝分かれの制約から付加詞を除くことができるとしても，問題は二重目的語構文をはじめとする二重補部構文(double complement construction)である。例えば，Jackendoff (1990)が論じているように，二重目的語構文では間接目的語も直接目的語も明らかに付加詞ではなく，項である。このことは間接目的語の一部を抜き出したり，あるいは直接目的語の一部を抜き出したりすることができるという事実によっても，容易に証明することができる。

(8) a. Which book shall we give [the author of] [a prize] ?

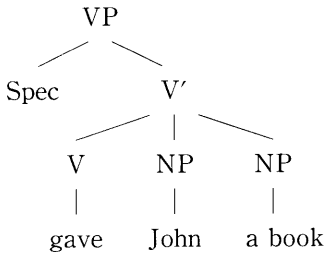
[Hudson 1992, p.258]

b. Who_i did you give John a picture of t_i?

したがって，次に示すように，二つの目的語のどちらも与格動詞の姉妹であるとすると，そのどちらかが付加詞であると主張することによって，三項枝分かれを回避することもできない[7]。

(9)　I gave John a book.

(10)



三項枝分かれを容認せざるを得ないのはどのような時であるのかを，便宜上動詞が主要部である場合に限って考えてみると，それは二つ以上の補部(または項)がある主要部の姉妹として生起する場合である。したがって，ここで浮上してくるのは，次の(11)の問題である。

(11)　いかなる補部(または内項)が動詞の姉妹となるのか。

この問題を考える時には，枝分かれの仕方をD構造とS構造とを別々に分けて考える必要がある。後述のように，内項は少なくともD構造ではすべて動詞の姉妹となっており，それは動詞から Chomsky (1986b) で言う直接的 θ 標示 (direct θ-marking) を受けるためであると考えられる。しかし，S構造になると話は別で，項補部であれば常に主要部動詞の姉妹であるわけではない。次節で見るように，S構造で姉妹となるのは補部の一部に限られており，結論から先に言うと，少なくとも主要部動詞によって格標示 (Case-marking) されなければならない補部は，S構造でもその姉妹である。補部や項であっても，主要部動詞によって格標示される必要のないものはその姉妹にはならず，V′の外に出ていることが多い[8]。

したがって，(9)の二重目的語構文のように，主要部動詞によって格標示されなくてはならい補部が二つ生起する場合は，三項枝分かれを容認せざるを得ないというのがここでの結論である[9]。

3．構造格付与の構造条件

3.1．格標示における姉妹関係

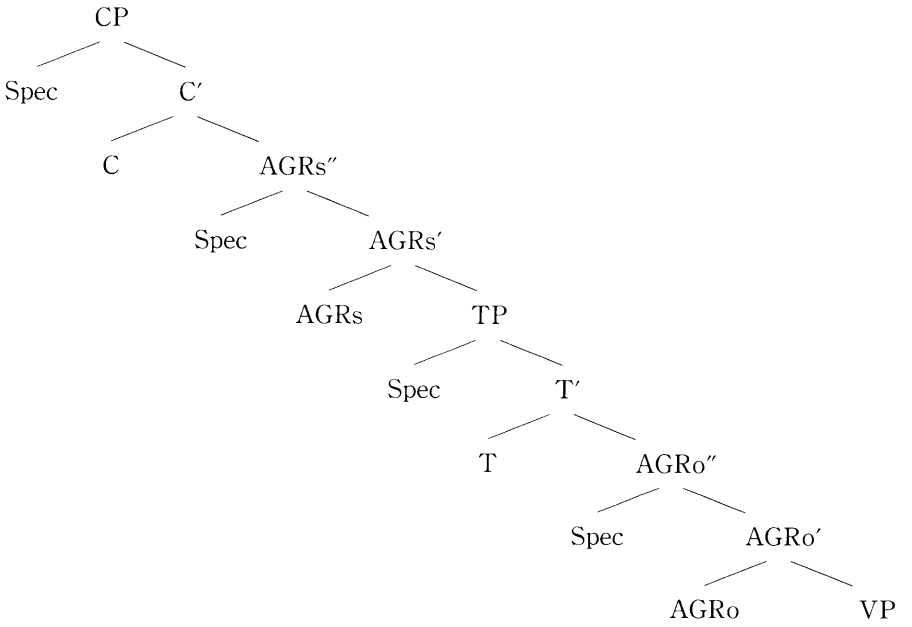
二重目的語構文の構造を決定する際には幾つかの要因を考慮に入れる必要があるわけであるが，特に重要な意味を持つのは，間接目的語と直接目的語の二つにいかにして抽象格(abstract Case) を付与するのかという問題である。この二つの目的語に格標示がなされる構造をつきとめることができれば，二重目的語構文の構造をほぼ決定することができるであろう。しかし，その前に動詞は一般にいかなる構造関係にある語彙的名詞句に目的格(対格)付与するのか，を明らかにすることが先決問題である[10]。

Chomsky (1981) をはじめとする多くの文献で，構造格付与(structural Case assignment) の構造的条件としてまず最初に言われたのが，C統御(c-command)を前提とした統率(govern-

ment)であった。しかしその後，格照合理論(Case-checking theory)が盛んになるにつれて，Chomsky (1991, 1993, 1994)等で構造格照合の条件として言われているのが，主格でも対格でも一様に指定辞・主要部の一致（spec-head agreement）である。主格の照合は AGRs とその指定辞に生じた NP との間でなされ，対格（目的格）は AGRo とその指定辞に生じた NP との間でなされる。その照合がどのレベルでなされるのかについては媒介変数による多様性があり，現代英語では主格の照合は顕在的統語論（overt syntax）でなされるのに対し，対格（目的格）の照合は陰在的統語論（covert syntax）でなされると言われている。

したがって，その格照合理論はいかなる言語にも普遍的に AGRs と AGRo が存在するという重大な仮説を含むことになり，およそ次の構造において格の照合がなされると考えられている。

(12)



しかし，AGRs の存在は認めるとしても，問題は動詞と目的語が一致(agreement)を示すことが決してない現代英語にも，AGRo が存在するのかどうかである。格照合理論そのものは正しいとしても，少なくとも現代英語で AGRo の存在を立証することはほとんど不可能であるし，その存在を仮定しても，経験的事実の説明に有意義な簡潔化をもたらすことができない[11]。

そこで，ここでは付与にせよ照合にせよ対格や目的格の標示を行うのは動詞であるという伝統的な考えに従い，動詞から格標示される要素は統語上どの位置にあるのかを検討する[12]。この問題に関しては Authier (1991)に重要な言及があり，それによると，動詞はそれを厳密下位範疇化する，V′に支配される要素にのみ格標示をすることができる。しかも，この主張は Choms-

ky (1981) の投射原理 (projection principle) と密接な関連がある。Authier によると，言語要素が生じる統語的位置は主要部が付与する θ 役割だけでなく，格からも投射されてくる。しかし，構造格である対格(目的格)はS構造で付与されるのであるから，格から投射される統語的位置はS構造で初めて出現することになる。その格から投射された位置に生じていると考えられるのが，次のような例における虚辞的 it (expletive *it*) である。

(13) a. They never mentioned *it* to the candidate [that the job was poorly paid]
b. We demand *it* of our employees [that they wear a tie]
c. I dislike *it* [for him to be so cruel]
d. John resented *it* [that Mary was leaving]
e. I hate *it* [when she does that to me]
f. I can't believe *it* [how nice everybody's been to me]

[Authier 1991, p. 723]

この虚辞的 it と後続の節 (CP) とは Chomsky (1986a) の言う大連鎖 (CHAIN) を成すという考えは認めず, it は動詞に厳密下位範疇化される位置にあるのに対し, CP は V′に付加された位置にあるとされている。また，英語では格付与に強制的性質 (mandatory character) があり，ある位置に θ 役割が付与されない場合でも，ある動詞の格枠 (Case frame) に存在する格は常に放出(discharge)される。さらに，格は動詞の姉妹にしか付与されないが，θ 役割は(13)の CP のように V′に付加された位置にある要素にも付与される。ここまで来ると，先の(11)の問題に対する答えは出たも同然であり，動詞の姉妹になるのは，それから格標示される補部のみに限られる。しかも，格フィルターが正しいとすると，格標示されなくてはならないのは語彙的名詞句であるから，動詞の姉妹になるのは名詞句補部のみということにもなる。以上の Authier (1991) の主張は，二重目的語構文の構造の決定にも大きな意味あいをもってくるので，特に注目に値する。

この Authier の主張で問題になりそうなのは，不定詞補文主語に目的格が与えられるいわゆる例外的格標示構文 (ECM 構文) であり，この場合は主節動詞が姉妹ではない要素に格を付与しているように見える。しかし，Postal (1974) をはじめ多くの文献で主張されている，不定詞補文主語の主節目的語への繰り上げがあるとすると，その問題も解消される。Authier は次のような例に基づいて，その繰り上げは存在すると主張している。

(14) a. * I proved conclusively him to be a liar.
b. * I believe irrefutably him to be a liar.
c. * I suspect strongly him to be a liar.

(15) a. ? I proved him_i conclusively [t_i to be a liar]
b. I believe him_i irrefutably [t_i to be a liar]
c. I suspect him_i strongly [t_i to be a liar]

(16) a. Linda believes herself to be popular.

b. Linda believes herself$_i$ [t_i to be popular]

[(14)-(16): Authier 1991, p.729]

主節動詞と補文主語との間に副詞が介在している(14)のような例は格付与に対する隣接性条件の違反になるが，(15)のように補文主語が副詞よりも前に出るとほとんど文法的になる。この事実は，補文主語の主節目的語位置への移動を仮定することによって説明することとができる。(15)には隣接性条件の違反はないし，補文主語の移動先となる主節目的語の位置は主節動詞が付与する格から投射された位置である。その位置と主節動詞とは当然姉妹関係にあるから，格標示に関しては何の問題もない。したがって，ECM 構文(16a)の正しいS構造は(16b)ということになる。また，このように見てくると，目的格を付与される名詞句はD構造で動詞と姉妹である必要はなく，S構造で姉妹であればよいことになる[13]。したがって，動詞による格標示はより正確には次の(17)になる。

(17) 動詞によって格標示される要素は，S構造でその動詞と姉妹でなくてはならない。

ここまでの Authier (1991)の主張は正しいように思われ，本論でもそれを前提として論を進めていく。

したがって，ここでは格標示と統率とは基本的に無関係であるという結論に至ったことになる。主格付与は SPEC-AGRs の位置にある主語名詞句に Tense と合体した AGRs によって行われるし[14]，目的格付与は動詞と姉妹関係にある名詞句にその動詞自身によって行われる。格標示は名詞句認可の最も基本的な過程であり，それには指定辞・主要部の一致と主要部・補部関係の二つが関わっている，というのが本論の立場である。Chomsky (1992, 1994)の最小主義プログラムでも，その二つは基本的関係(fundamental relation)として尊重されているにもかかわらず，なぜか格照合は指定辞・主要部の一致のみに任せられてしまっている。それを彼は格理論の簡潔化と言いたいのであろうが，主要部・補部関係が基本的関係として存続する限りは，それに格照合の仕事をさせないのは，かえって指定辞・主要部の一致との釣り合いがとれず，不自然である[15]。

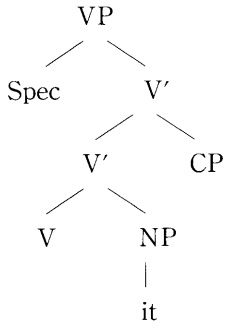
3.2. D構造と θ 標示の概念

しかし，Authier (1991) の主張はD構造に関する Chomsky (1981) の概念に重大な変更を迫る内容を含んでいる。周知のとおり，Chomsky の理論ではD構造は θ 構造 (θ-structure) の純粋な標示 (pure representation) として定義されている。ところが，目的格から投射された位置に虚辞的な it が生じる場合は，その位置にD構造でいかなる θ 役割も付与されないのであるから，D構造は θ 構造の純粋な標示ではなくなる，という。しかし，これには論理矛盾があるように思われる。前述のように，格はS構造で初めて放出 (discharge) されるのであるから，虚辞が現れる位置はD構造には存在せず，D構造では語彙的主要部(lexical head)の θ 構

造から投射される位置のみが現れるはずである[16]。それならば，D構造は θ 構造の純粋な標示という，Chomsky (1981) のD構造の概念を修正する必要はないであろう。したがって，本論では格からも統語的位置が投射されるという Authier の主張は支持するが，D構造の概念に特別な修正を加えないことにする。

Authier によると，Chomsky (1981) の理論にはもう一つ大きな変更を加える必要があり，それは θ 標示がなされる位置に関してである。Chomsky のもともとの主張では，ある語彙的主要部によって θ 標示されるのは，その主要部から厳密下位範疇化される位置のみであったが，Authier (1991) の主張では，節 (CP) は V′に付加された位置に基底生成され，そこの位置で

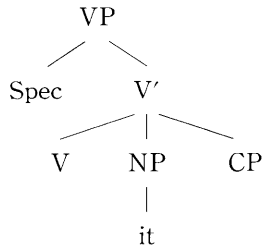
(18)



θ 標示される。

動詞と姉妹の位置には虚辞的 it の位置がS構造で投射されてくる時に，CP がD構造で既に動詞の姉妹として生成されていれば，次に示すように V′がS構造で三項枝分かれになってしまうであろう。

(19)



Authier は二項枝分かれ仮説を採っているため，(19) は許されず，CP は動詞の姉妹として生成されることができない。そこで，CP は内項でありながらも，V′付加とせざるを得なくなり，V′付加の位置にも θ 標示をせざるを得なくなる。しかし，それではD構造から V′付加位置に生成される項を，付加詞とどのようにして識別するのかという問題が出てくる。やはり，その位置は本来は付加詞が現れる位置であろうから，項は少なくとも一度は動詞の姉妹の位置に現れるべきで，それはD構造においてということになるであろう。したがって，主要部の内項はすべ

てD構造ではその主要部と姉妹であり，複数個の項を取る動詞では V′が常に三項以上の枝分かれになる。

仮に項が V′付加の位置に基底生成されたとしても，要素自体の統語範疇 (syntactic structure)から項か付加詞かは識別できるから基本的に問題はない，という反論もあるであろう。例えば -ly 副詞(-*ly* adverb)が項になることはほとんどないので，その方法も悪くはないであろう。しかし，次のような例を見るならば，要素の統語範疇のみから項と付加詞の区別ができないことは明らかであろう。

(20) a. John put the book on the table.
　　 b. John found the book on the table.
(21) a. I don't know when John will leave.
　　 b. He walks when he might ride.
(22) a. Yesterday will be fine.
　　 b. I told it to him yesterday.
(23) a. She had no way of telling what she thought.
　　 b. The way I see it, there is no hope for him.

最初の(20)では，同じ前置詞句 on the table が(a)では項で，(b)では付加詞である。次の(21)では，when 節が(a)では項で，(b)では付加詞である。(22)では，yesterday が項としても付加詞としても機能している。さらに，(23)では(a)の no way... が項であるのに対し，(b)の the way... は付加詞である。これでは，統語範疇から項と付加詞の区別をすることはほとんど不可能に近い。

しかし，少なくとも名詞句は項として機能することが多く，付加詞となることは非常に少ないから，項と付加詞の区別に何らかの役割を果たしている統語範疇もあるという反論もあるであろう。確かにそういう面はあり，それは認識しておかなくてはならない。しかし，次のような事実をみるならば，これも必ずしも絶対的に正しい事実ではない。

(24) a. John has been working on this table (for) three hours.
　　 b. I'm going to step outside (for) just a moment.
　　 c. The guests registered here (on) October first.
　　 d. You should pay your bill (on) the last day of the month.
(25) a. He paid the rent (*on) last Saterday.
　　 b. They deliver the paper at noon (*on) every weekday.
　　 c. I'll finish my dessert later (*in) this afternoon.
　　 cf. I'll finish my dessert later in the afternoon.

[Emonds 1976, p.79]

こうした例は，前置詞がなくても名詞句が付加詞として機能できることを示している。(24)の

ように前置詞が随意的であれば，基底には常に前置詞が存在し，名詞句が付加詞となることはない，と言い切ることもできるであろう。しかし，(25)では前置詞が現れてはならず，基底にある前置詞が省略されたと断言できない面があり，名詞句が付加詞として機能する可能性を消し去ることができない[17]。

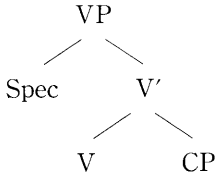
3.3. 内項の統語的位置

前節で挙げた種類の例を見ると，やはり項と付加詞は大部分は構造上の位置によって識別するしかなく，Chomsky (1981) の θ 理論に従って，少なくとも内項 (internal argument) に関しては次のように仮定するしかないであろう[18]。

(26)　統語範疇の種類にかかわりなく，内項はD構造で主要部の姉妹として生成されなくてはならない。

したがって，いわゆる直接的 θ 標示 (direct θ-marking) は Chomsky (1981) の当初の方針どおりに動詞の姉妹に限定することができる。そうすると，目的語の位置に虚辞的 it が生じる例のD構造は主要部Vの θ 構造から投射される次の(27)であるが，S構造は格から投射される位置も含む(19)であると考えることができる。

(27)



ただし，(19)がS構造であるとすると，V′の三項枝分かれをこのまま認めるのか，それとも何らかの操作によって二項枝分かれに調整されるのかという問題については，さらに考察する必要がある[19]。

ところで，Auhier が提案した(18)の構造には，目的語位置への不定詞補文主語の繰り上げとの関連で大きな問題がある。すなわち，Tanaka (1991) でも指摘されているとおり，(18)が正しい構造であるならば，それは繰り上げではなく，むしろ不定詞補文主語をこの場合は it が生じている位置へ繰り下げることになる。Chomsky (1973) 以来，一般に自然言語には繰り上げ移動は存在するが，繰り下げ移動は存在しないと言われてきたわけであり，軽々に繰り下げ操作を認めるべきではない。しかし，そうせざるを得なくなったのは，三項枝分かれ句構造をあまりにも厳しく排除するがために，項CPをV′付加にした当然の帰結であり，これは明らかな問題点である。その点，三項枝分かれをある程度は容認し，CPも含めてすべて内項は(19)のようにD構造で主要部と姉妹であるとすると，不定詞補文主語は it の位置へ文字どおり繰り上げられることになる。やはり，繰り下げを排除できるという点で，これは望ましい結論と言うべきであろう。

ここで，S構造が(19)のように三項枝分かれになってもよいのか，という前述の問題にもう一度戻ることにしよう。確かに，二つの名詞句目的語を伴う二重目的語構文では既に三項枝分かれを認めたのであるから，(19)の場合にも三項枝分かれがあってもよいとも考えられる。しかし，付加詞が複数個現れる場合にのみ多項枝分かれを許す相対二項枝分かれ仮説の趣旨からすると，付加詞ではない虚辞的 it と CP があるからといって，三項枝分かれをすぐに認めるわけにはいかない。次節で見るように，二重目的語構文では二つの目的語名詞句が共に動詞の姉妹であると見なさざるを得ない理由があるし，経験的証拠もあるが，(19)や類似の構文ではそれがない。いずれにせよ，動詞から格標示される要素はS構造でその動詞と姉妹関係になくてはならない，という本節での結論がこの問題との関連で大きな意味を持ってくる。

4. 三項枝分かれの必然性

4.1. 与格動詞の姉妹

理論的・経験的根拠は次第に明らかにするとして，現代英語の二重目的語構文の構造を決定するためには，二つの名詞句目的語にいかなる抽象格が，何によって，どういう条件で付与されるのか，についてここで本論の立場を明らかにしておく必要がある。それは次のとおりである。

(28) 現代英語では，二重目的語構文の二つの目的語はS構造において与格動詞との姉妹関係を条件として，どちらも目的格（対格）を付与される。

この主張はまだ証明されていない幾つかの重要な仮説を含んでいると同時に，幾つかの大きな問題も含んでいる。それを整理すると，次のようになるであろう。

(29) a. 目的語が二つとも与格動詞の姉妹であることを示す証拠はあるのか。

b. なぜ目的語は二つとも目的格を付与されると言えるのか。

c. 構造格付与では隣接性条件が問題となり，間接目的語は与格動詞と隣接するものの，直接目的語と与格動詞との隣接性はどうなるのか。

少なくともこの三つの問題が解決されない限り，(28)の主張が正しいことにはならないのであるが，これらは非常に大きな問題であるので，以下または今後の稿において順次解決していく。ただ，(28)が正しければ，二重目的語構文では三項枝分かれ構造がS構造でも必然的になる点が，重要な意味を持っている。

1970年代では与格動詞とその二つの目的語とが姉妹関係にあり，この三者を直接支配する節点(node)が三項枝分かれになるのは，ある意味では自然なことと考えられていた。しかし，Barss & Lasnik (1986)で(30)の束縛をはじめとする幾つかの事実から，間接目的語が直接目的語を非対称的にC統御（asymmetrically c-command）するという主張がなされてからは，それは必ずしも自然な考えではなくなりつつある。

(30) a. I showed John himself (in the mirror).

b．I showed himself John (in the mirror).

[Barss & Lasnik 1986, p.347]

もちろん，その非対称的C統御説は二項枝分かれ仮説とも密接な関連があることは言うまでもない。しかし，Jackendoff (1991) では(30)のような事実に対する非対称的C統御による説明に意義が唱えられ，Napoli (1991) ではその事実認識自体が誤りであるとも言われている。そこで，ここでは与格動詞と二つの目的語の三者が，すべてV′に支配される姉妹となる伝統的な構造を支持する立場から論を進める[20]。

しかし，その伝統的な構造もその必然性が過去において一度も立証されたことはなく，与格動詞は三項述語 (3-place predicate) であるからという漠然とした直感にすぎなかったであろう。三項枝分かれ構造の最も熱心な推賞者と言われている Green (1974) や Oehrle (1976) にもそれはないし，また比較的最近の Jackendoff (1991) や Napoli (1991) にもない。その点，本論ではS構造における三項枝分かれ構造の必然性が(28)から導き出される。

4.2．二重目的語と様態の副詞の分布

二重目的語構文の二つの目的語が与格動詞とどちらも姉妹関係にあることを示す証拠の一つは，様態の副詞 (manner adverb) の分布にあるように思われる。Nakajima (1986) によると，項以外でも動詞と姉妹になる要素は存在し，次の例における-ly 副詞も動詞の姉妹である。

(31) a．John yelled forcefully the command.

b．Bill saw quickly the intention.

c．She repeated softly her question.

d．Mary recommended casually the name of a close friend.

[Nakajima, 1986]

ほとんどの場合，次の(32)に示すとおり，現代英語の-ly 副詞は動詞と目的語の間には生じないのであるが，この例では生じており，Nakajima はこれらの副詞は V′に直接支配されると考えて，V′副詞 (V′-adverb) と呼んでいる[21]。

(32) a．I sincerely believe the boys.

b．* I believe sincerely the boys.

[Nakajima, 1986]

動詞と目的語の間に生じない副詞は動詞の姉妹ではなく，V″に直接支配されるとし，そうした副詞を V″副詞 (V″-adverb) と呼んでいる。こうした事実を構造格付与に対する隣接性条件と関連づけ，Nakajima は次の(33)の主張をしている。

(33)　α と β の間にいかなる主要範疇 (major category) も存在しないならば，α は β に隣接する。

[Nakajima, 1986]

ここで言う主要範疇とは，範疇素性［±V］と［±N］の組み合わせによって決定される統語範疇であり，NP, PP, VP, AP がそれに含まれる。例えば，次の(34b)は(33)の違反になる。

(34) a． John [$_{VP}$ sent his new book to Mary].

b． John [$_{VP}$ sent to Mary his new book].

［Nakajima, 1986］

一方，-ly 副詞は主要範疇ではなく，(33)の定義からすると，(31)や(32)には隣接性条件の違反がないことになる[22]。それでは，なぜ(32b)が非文法的になるのかというと，V″副詞である carefully が V′の位置に生じていて，Keyser (1968) の搬送可能性規約 (transportability convention) に違反するからである。

以上の Nakajima (1986)の主張は非常に優れた洞察を含んでいるが，二重目的語構文との関連でさらに検討の余地がある。

(35) a． John gave (*sincerely) Mary (*sincerely) all the money.

b． John read (*carefully) Mary (*carefully) Bill's letter.

［Nakajima, 1986］

Nakajima も与格動詞と二つの目的語が姉妹関係にある伝統的な構造を前提としており，(35)に示した位置に副詞が生じることができないのは，V″副詞が V′の位置に生じているからであると主張している。二つの目的語が両方とも動詞の姉妹であれば，(35)では確かに副詞もすべて動詞の姉妹にならざるを得ず，搬送可能性規約の違反になる。これも妥当な結論と思われ，次のように V″副詞と考えられる様態の副詞は二つの目的語の後ろにのみ現れることができる。

(36) a． * Sally [surreptitiously] gave Bill the book.

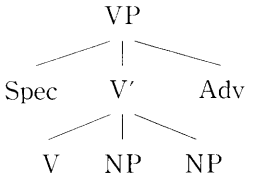
b． * Sally gave Bill [surreptitiously] the book.

c． Sally gave Bill the book [surreptitiously].

［Napoli 1993, p.197］

この場合，様態の副詞は文尾にあるときのみ V″の位置に現れることができ，搬送可能性規約違

(37)



反がないのは(36c)のみである。この例の VP 部分は次の構造になるであろう。

直接目的が与格動詞の姉妹ではなく，V′の外に位置することができるとすれば，(36b)もその規約違反にならない可能性がある。しかし，この例はやはり非文法的で，直接目的語が V′の外に位置する可能性はない[23]。

これに対して，前置詞与格構文でも gave は三項述語に違いないであろうが，様態の副詞が次

に示すように(36)とはかなり異なる分布になる。

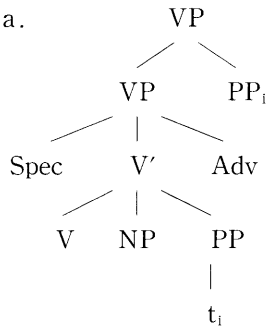
(38) a．* Sally gave [surreptitiously] the book to Bill.

b．Sally gave the book [surreptitiously] to Bill.

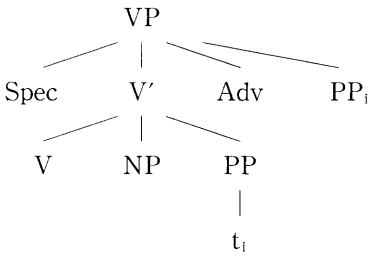
c．Sally gave the book to Bill [surreptitiously].

この場合も，(38a)では様態の副詞が動詞と直接目的語の間にあって，V″に直接支配される位置に現れていないので，搬送可能性規約に違反すると考えられる。注目すべきは(38b)であり，様態の副詞が与格動詞の二つの項の間に生じている点では(36b)と同様であるにもかかわらず，文法的である。to Bill が項である限り，それもD構造では与格動詞の姉妹でV′に支配されていたが，次の(39a,b)どちらかの構造を取ってS構造までにその外に出たと仮定しなくてはなら

(39) a.



a.



ない。

そうすると，(36)では二つの項がS構造でもV′の内側に留まっているのに対し，(38)では前置詞を伴った項がその外側に出ていることになる。問題は，その項が義務的にV′の外側に出る必要があるのかどうかである。(38c)の文法性は，to Bill がまだV′の内側に留まっていることを意味しているようにも見えるが，それは(38c)にどのような構造を仮定するかに関わっている。様態の副詞 surreptitiously はD構造からV′の外にあり，to Bill はそれよりも左側にくる形でS構造までにV′の外に出た，と考えればよいだけのことである。こうしたもともとV′の外側にある要素の統語的位置や，移動によって外に出た要素の着地点（landing site）がどこになるのか，に関する問題は未解決のままにしておきたい[24]。しかし，いずれにせよ二重目的語構文では与格動詞と二つの目的語が姉妹関係にあると，様態の副詞の分布から言えることが明らかになったでろう。

4.2．二重目的語と不変化詞の分布

前節の結論を支持するもう一つの証拠になると思われるのが，動詞・不変化詞構文（verb-particle construction）における不変化詞が二重目的語構文に生じた場合の分布である。Emonds (1972, 1976) や Jackendoff (1977) などで指摘されたように，不変化詞は二つの目的

語の間に最もよく生じ，与格動詞と間接目的語の間にはかなり生じにくく，直接目的語の後ろ（文尾）では非文法的になる。

(40) a． The secretary sent a schedule out to the stockholders.

b． The secretary sent out a schedule to the stockholders.

(41) a． The secretary sent the stockholders out a schedule.

b．?* The secretary sent out the stockholders a schedule.

c． * The secretary sent the stockholders a schedule out.

[(40)-(41): Jackendoff 1977, p.68]

言うまでもなく，不変化詞は語彙的な直接目的語の前にも後ろにも現れることができ，本来であれば次の(42a)と(42b)のどちらが基底構造であるのかを決める必要がある。

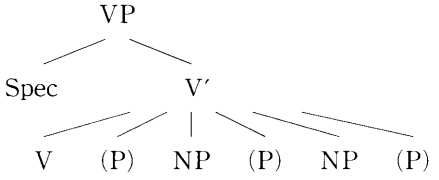
(42) a． John looked up the information.

b． John looked the information up.

しかし，これはあまりにも大きな問題であるので，ここでは基底構造に関する問題には立ち入らず，不変化詞はV′副詞と同様にV′の内側にあるという意味で，V′要素であると仮定するにとどめる[25]。

そのように仮定すると，不変化詞はKeyser (1968) の搬送可能性規約に従って移動すると考えることができ，(40)-(41)の各例の文法性と非文法性を説明する手掛かりを摑むことができる。二重目的語構文の二つの目的語も不変化詞もすべてV′に支配される，与格動詞の姉妹であるとすると，不変化詞は動詞と間接目的語の間，間接目的語と直接目的語の間，直接目的語の

(43)



後ろ，の三箇所に次に示すように現れることができると予測される[26]。

動詞・不変化詞構文に特有の幾つかの要因が絡んでくるので，実証は容易ではないが，その予測は基本的に正しい。

第一に，間接目的語と直接目的語の間に不変化詞が生じる事実は，問題となる要素がすべて姉妹関係にあるという仮定に立って搬送可能性規約の観点から見ると，それは極自然なことである。したがって，(41a)は当然文法的である。第二に，与格動詞と間接目的語の間に不変化詞が現れることができるかどうかは大きな問題であり，Emonds (1976)によると，異なる文法性の判断を示す三つの方言がある[27]。

(44) a． ? The secretary sent out the stockholders a schedule.

b． ? Some student paid back the bank his loan.

c．? John read off Mary the figures.

d．? A clerk will type out John a permit.

e．? Bill fix up John a drink.

f．? He has brought down Dad some cigars.

[Emonds 1976, p.83]

方言Aでは(44)が容認可能と判断され，方言Bでは不変化詞が文尾にくる時ほど悪くはないにせよ容認不可能と判断され，方言Cでは対応する前置詞与格構文に to が使用される例は容認可能で，for が使用される例は容認不可能である。(44)の文法性が下がる理由ははっきりしないが，こうした例を完全に排除する方言がないという点が重要であろう。そうすると，(41b)や(44)も(43)の構造の正しさを否定する例ではないと言うことができる。第三の不変化詞が文尾に現れる場合はほとんど完全に非文法的になるので，一見(43)の反例のように見える。しかし，この場合は(41c)が非文法的になる理由が比較的はっきりしていて，(41b)や(44)よりもむしろ問題がない。これについては，Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983) の次の指摘と用例が大いに参考になる。

(45)　直接目的語が長い（音韻上多音節的かつ/または統語上複合的）ならば，不変化詞は動詞の隣りに生じなくてはならない。

(46) a．? The President called the Under Secretary of the Interior up.

b．　The President called up the Under Secretary of the Interior.

(47) a．*/? When we are going to take the agenda item that we postponed last Wednesday up.

b．　When we are going to take up the agenda item that we postponed last Wednesday.

[(45)-(47): Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1983, p.272]

すなわち，不変化詞は動詞から遠くに離れることを嫌う傾向があり，不変化詞が二重目的語構文の文尾にきて動詞から二つの目的語によって隔てられる場合も，この制限の違反が起こるのであろう[28]。したがって，(41c)の非文法性も(43)の構造に対する反例ではない。実際，そのような例が文法的になる場合もある[29]。

(48) a．　John gave the bank back the money.

b．　John gave the bank the money back.

c．* John gave back the bank the money.

[Erteschik-Shir 1979, p.458]

(49) a．　John paid the bank back his loan.

b．　John paid the bank his loan back.

c．? John paid back the bank his loan.

[Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1983, p.273]

(50) a. ? Sam handed her them down.

b. * Sam handed down her them.

(51) a. Gary poured me some out.

b. * Gary poured out me some.

[(50)-(51): Johnson 1991, p.623]

非常に厳しい制限はあるものの，(48b)，(49b)，(50a)，(51a)のような例が存在し，(43)の構造が正しいことを物語っている[30]。

4.3. 不変化詞分布の語用論的特性

しかし，(41b)と(44)，および(48b)，(49b)，(50a)，(51a)が期待されるほど文法性が高くないのはなぜか，についてはまだ検討の余地がある。この問題に関しては，Erteschik-Shir (1979) で語用論 (pragmatics) の観点から興味深い主張がなされている。その主張は1970年代の標準な与格移動変形と不変化詞移動変形の存在を前提としているが，変形規則自体にはさほど大きな意味はなく，むしろ彼女の考察の本質的内容が注目に値する。それは，次の前置詞与格構文における不変化詞の考察から始まっている。

(52) a. John gave back the money to the bank.

b. John gave the money back to the bank.

c. * John gave the money to the bank back.

[Erteschik-Shir 1979, p.458]

説明の都合上，(52a)が基底構造で，(52b)はそれから随意的な不変化詞移動によって派生されると考えられている。また，移動変形の適用は優勢性(dominance)という語用論的概念によって制限され，話し手が聞き手の注意を引こうとしている文中の構成素が優勢的になる。不変化詞移動では，移動前と後の不変化詞の位置が優勢性と深い関連がある。移動前の(52a)では直接目的語と to 間接目的語の両方が優勢になり，移動後の(52b)では to 間接目的語のみが優勢になる。(52c)については，優勢性の観点からの考察はなく，これを派生する規則は何もないから派生されない，とだけ述べられている。次に前置詞を含まない(48)の例に移って，(48a)は(52a)から与格移動変形によって派生される。その結果，(48a)では the bank が非優勢的となり，the money が優勢的になる。(48b,c)については，与格移動変形が(52a)から(48b)のみを派生して(48c)を派生しないように定式化すればよいのであるが，(48c)は語用論的理由によっても排除される。不変化詞 back の後ろにあるので，一方では the bank は優勢的と解釈されるが，他方では与格移動変形の適用により非優勢的であるとも解釈されるため，語用論的矛盾が生じる。その矛盾のために，(48c)が非文法的になる。(48b)の文法性は語用論的説明が困難な面があり，不変化詞の位置からすると目的語は二つとも非優勢的と解釈されなくてはならないが，そ

れが本質的な影響を及ぼさないから文法性が低下しない，と主張されている。そうすると，次の例において，(53a)よりも(53b)の文法性が低下する事実を理解することができる。

(53) a．　Some student paid the bank his loan back.

　　b．? Some student paid the bank a loan back.

[Erteschik-Shir 1979, p.459]

不定名詞は優勢的になりやすいという事実があるにもかかわらず，不変化詞との位置関係からすると，(53b)の a loan は非優勢的と解釈されなくてはならないから，語用論的な矛盾が生じる。

しかし，Erteschik-Shir 自身が述べているように，その主張では Emonds (1976)が次の(54)を非文法的と判断している事実を説明することができないし，(41c)についても同様である。

(54) a．* The secretary sent the stockholdrs a schedule out.

　　b．* Some student paid the bank his loan back.

　　c．* John read Mary the figures off.

　　d．* A clerk will type John a permit out.

　　e．* Bill fixed John a drink up.

　　f．* He has brought Dad some cigars down.

[Emonds 1976, p.82]

この事実は，(54)に与格移動変形が要求する語用論的効果と，不変化詞移動が要求する語用論的効果との間に矛盾があり，その矛盾を強く感じる人がいると考えれば，説明することができる。Erteschik-Shir によると，そのような矛盾が生じるのは，与格移動変形は直接目的語が優勢的になることを要求するのに対し，不変化詞移動変形は非優勢的になることを要求するからである。もしそうであるとすると，(41c)や(54)のような例がなぜ非文法的であるのかを説明でき，その理由が統語構造に起因するのではないことも分かるであろう。これに Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983) が指摘した(45)の要因も，加味して考える必要があろう。

以上，二重目的語構文における不変化詞の分布を見るならば，(43)のように与格動詞，間接目的語，直接目的語，不変化詞の四者が姉妹関係にある統語構造を否定する証拠は何もない。(41b)と(44)，および(48b)，(49b)，(50a)，(51a)でさえも完全には排除されるのではないことを考えれば，むしろ(43)の構造を積極的に認めなくてはならないであろう。

5．前置詞与格構文の構造

これまで，前置詞与格構文における不変化詞の分布についてはほとんど考察しなかったが，不変化詞はこの構文の統語構造の決定にも重要な意味あいをもってくる。それの基本的分布は既に(40)と(52)に挙げたとおりであり，英語母国語話者の間で文法性の判断に大きな揺れはな

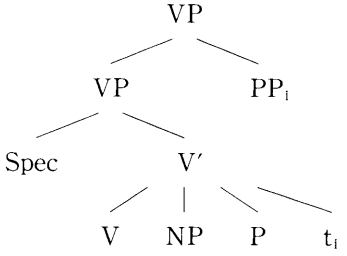
いようである。(42a,b)と(52a,b)に挙げたように不変化詞は与格動詞と直接目的語との間，直接目的語の直後に自由に生じることができ，その限りでは単純な他動詞構文における不変化詞の分布と同じである。しかし，(52c)に挙げたように，前置詞を伴った間接目的語の後ろに現れることはできない。しかも，この(52c)の非文法性に関しては個人差や方言による違いも，調査した限りではないようである。

この事実が意味するものは非常に大きく，to 前置詞句の統語上の位置づけの問題になってくる。不変化詞は派生のすべての段階で動詞と姉妹関係にあるとすれば，to 前置詞句が動詞との姉妹関係を派生のある段階でやめてしまうと考えれば，(52c)の非文法性を説明することができる。例えば，次の(55)のように，to 前置詞句が項の位置から付加詞の位置へ繰り上がると考えることができるであろう。

(52) c . * John gave the money to the bank back.

[Erteschik-Shir 1979, p.458]

(55)



もしそうであるとすると，(52c)では V′ の外へ出してはならない不変化詞を出すことになり，不変化詞の搬送可能性規約に違反する。しかも，(52b)が文法的で(52c)は非文法的なのであるから，to 前置詞句の繰り上げは義務的なはずである。その義務性がどういう原理から来るのかはいずれ明らかにされなくてはならないが，ここでは義務性自体の立証をさらに行う必要がある。その前に，(52c)の非文法性は与格動詞と不変化詞の間に，あまりにも多くの要素が介在することから来ているのであって，to 前置詞句の繰り上げとは関係がないという反論があるかもしれない。すなわち，Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983) の(45)の条件が働いているという反論である。しかし，もしこの例の非文法性の理由がそれであるならば，(46a)や(47a)と同じくらいの非文法性の度合いになるはずで，それほど完全には排除されないと予測される。ところが，(52c)は全く非文法的であるから，その原因は(45)ではないことになる。

前置詞与格構文に限らず，本来は項であるはずの前置詞句が V′の外に出ていると思われる例が他にも存在する。例えば Jackendoff (1977) の次の例に見るように，項名詞句と項前置詞句との間には明らかな違いがある。

(56) a . Charlie put the book on the table three times.

b . ? Charlie put the book three times on the table.

c．* Charlie put three times the book on the table.

(57) a．　Charlie told Edna the story three times.

b．* Charlie told Edna three times the story.

c．* Charlie told three times Edna the story.

[Jackendoff 1977, p.140]

注目すべきは，(56b)の文法性が(57b)よりもかなり高いという点である。three times は Jackendoff も X″副詞として扱っており，X′副詞ではあり得ない。そうすると，(56b)の文法性は，put の項と言われている on the table が V′の外に出ないことには説明することができない。一方，(57b)の非文法性は項名詞句は決して V′の外に出ないことを意味している。こうした場合と同様に，前置詞与格構文の to 前置詞句も V′の外に義務的に出ると言えるであろう[31]。

for 前置詞与格構文になると，Czepluch (1982)が指摘するように，前置詞句の付加詞的な性格が to 前置詞句よりもさらに鮮明に出てくる。

(58) a．　John bought the book (for Mary).

b．　John gave the book *(to Mary).

(59) a．　John bought a book for Mary, and Dill did so for Sue.

b．* John gave a book to Mary, and Bill did so to Sue.

(60) a．　John put the beer into the ice-box for Mary.

b．* John put the beer into the ice-box to Mary.

[(58)-(60): Czepluch 1982, p.26]

Czepluch によると，(58a)のように for 前置詞句は随意的であるし，(59a)のように do so 照応の中に含まれないし，(60a)のように他に着点項が既にある場合でも容認可能であるなどの点で，to 前置詞句とは異なっている。この違いに基づいて，彼は for 前置詞句は付加詞であるのに対し，to 前置詞句は項であると主張している。このような違いがなぜ出てくるのかについてここでは論じないし，for 前置詞句もD構造では項で V の姉妹であると考える[32]。しかし，S構造までには V′の外に出ていて，その位置は to 前置詞句の場合よりもさらに外側にあるのであろう。例えば to 前置詞句は V′に付加されるのに対して，for 前置詞句は VP に付加されるとすればよいであろう。ただ，それだけでは(58)-(60)の違いに適切な説明を与えることができないので，これは今後の課題として残しておく。

いずれにせよ，これまでの議論から前置詞与格構文の to/for 前置詞句がS構造までには，V′の外に出ていることが明らかになったであろう。

6．直接目的語の格標示

これまで見たように，二重目的語構文では動詞に隣接する間接目的語ばかりでなく，動詞に

隣接しない直接目的語までもがS構造においても動詞の姉妹であり，V′の外に出ることがない。その一方で，前節で見たように，前置詞与格構文のto/for前置詞句は義務的にV′の外に出なくてはならない。そうすると，問題はなぜそれら名詞句項と前置詞句項で，このような分布の違いが出てくるのかである。その答えはやはり格標示にあるように思われ，名詞句項は与格動詞によって格標示されなくてはならないが，前置詞句項はその必要がないところに原因があると考えられる。

そうすると，ここで重要になってくるのは，3.1.節で到達した(17)の格標示に対する条件である。

(17) 動詞によって格標示される要素は，S構造でその動詞と姉妹でなくてはならない。

この条件が正しいとすると，二重目的語構文の二つの目的語が動詞とS構造で姉妹でなくてはならないのは，どちらもこの表示のレベルで格標示されるからであるという結論になる。間接目的語には姉妹関係を構造条件として，隣接する与格動詞から構造格が付与される。しかし，問題は4.2.節で触れたNakajima (1986)の隣接性条件(33)を仮定した場合に，与格動詞と隣接しない直接目的語にいかなる格がいかにして付与がなされるのかである。

(33) αとβの間にいかなる主要範疇(major category)も存在しないならば，αはβに隣接する。

[Nakajima, 1986]

二重目的語構文では与格動詞と直接目的語の間に常に主要範疇である間接目的が介在し，前者二つの間には(33)の意味においてすらも隣接性はあり得ない。この構文における直接目的語の格標示に関するNakajimaの答えは安易なもので，それには与格動詞から内在格が付与されることになっている。内在格付与には(33)の意味での隣接性条件さえも課されないため，与格動詞は目的語を内在的に格標示できるというのである[33]。

しかし，稿を改めて論じるように，現代英語には内在格が存在せず，二重目的語構文の直接目的語に内在格が付与されるという答えは，少なくとも現代英語では正しい可能性が全くない。したがって，直接目的語には(33)の隣接性条件さえも課されずに，姉妹関係のみを構造条件として与格動詞から構造格が付与されると考えられる。このように主張すると，それでは構造格付与にはいかなる隣接性条件も課されないのかという疑問が湧いてくるであろう。この問題も稿を改めて論じなくてはならないが，基本的にはいかなる隣接性条件も課されないと考えられる。むしろ，姉妹関係が隣接性条件の内容を含んでいる。動詞の姉妹が多ければ多いほど，その目的語名詞句が動詞から離れてしまう可能性が高くなるが，実際には姉妹の数を限定しようとする言語内的圧力(linguistic drive)がある。前置詞項がS構造までにはV′の外に出るという前節の事実も，その言語内的圧力の一つの現れと見ることができる[34]。

もしそうであるとすると，動詞と目的語の間の距離は隣接とまではいかなくとも，自ずとある程度の範囲に限られてくるであろう。したがって，次の課題はその言語内的圧力の正体を明

らかにし，動詞の姉妹は幾つまで許容されるのかも明らかにすることである。

7. まとめ

二重目的語構文と前置詞与格構文とは項構造は同じで，D構造は三項枝分かれになっているが，S構造はかなり違ったものとならざらるを得ない。その理由は目的語の格標示にあり，二重目的語構文では間接目的語も直接目的語も与格動詞から構造格を付与されなくてはならないため，その二つの目的語はS構造でも動詞の姉妹であり続ける。一方，前置詞与格構文では，動詞から格標示される直接目的語はS構造でも動詞の姉妹であるが，to/for 前置詞句はS構造までには義務的に V′の外に出なくてはならない。こうしたS構造の違いは，動詞による目的語の格標示が姉妹関係を構造的条件としてS構造で行われることに起因する。

しかし，本章のこれまでの議論にはまだ未定の点や，十分には立証されていない点や，他の文献で提案されているかなり有望な諸原理との関連が不明な点など，今後に残された課題が非常に多い。それらをまとめると，次のようになる。

(61) a．to/for 前置詞句が V′を外に出す言語内的圧力の正確な定義付けと，S構造でも動詞の姉妹であり続ける要素のさらに厳密な特定化。

b．目的格（対格）の付与が姉妹関係を構造条件として行われるとしても，それと隣接性条件との関連を明らかにすること。

c．目的格を二つも付与することができる与格動詞の語彙的特性の特定化と，例えば Cezpluch (1982) 等が言う単一格原理（single Case principle）との関連性。

この最後の課題にはここでは全く触れなかったが，現代英語の与格動詞が二つの目的格を付与するという主張は単一格原理と真っ向から衝突する。単一格原理が非常に説得力のある原理であるだけに，この課題は特に重要である。

注

1）　二重目的語構文と前置詞与格構文を論じる際には，いかなる格理論（Case theory）に基づくかが非常に重要な問題となってくる。本論が前提としているのは，GB 理論と言われた Chomsky (1981) における格理論であり，最小主義プログラムと言われている Chomsky (1983) の格理論ではない。

2）　Larson (1988, 1990) は次の主題階層を仮定しており，述語の項はこの階層に従ってD構造で配置される。

i）AGENT > THEME > GOAL > OBLIQUE

しかし，i）の主題階層が正しい証拠はなく，この点でも Larson (1986, 1990) の主張は見直しを迫られるであろう。

3）　ここで付加詞を VP に付加したのは便宜的なもので，それで正しいというつもりはない。特に (2b) では V′に付加詞を付加し，V′を繰り返し的にする構造も考えられるであろう。

4）　それでは，Many peopel eat in London in restaurants. という語順が絶対に許されないのかと

いうと，それは微妙な問題でこの語順を許容する英語母国語話者もいる。

5） Kayne (1993) は線形語順を要素間のC統御関係から導きだそうとしており，概略ある要素Aがある要素Bを非対称的にC統御 (asymmetrically c-command) するならば，AはBに先行しなくてはならない。しかし，この主張でも付加詞や名詞前位形容詞 (prenominal adjective) の線形語順を適切に扱うことはできないでいる。

6） 言語の繰り返し的特性のすべてが多項枝別れの原因になる，ということではもちろんない。目的語節が順次埋め込まれている次の例では，その無限性から多項枝分かれが生じてくることはない。

i）a． John said that Mary was ill.
b． Fred said that John said that Mary was ill.
c． Harry said that Fred said that John said that Mary was ill.
d． Etc.

[Radford 1988, p.22]

他にも，関係代名詞節の繰り返し，等位接続項の繰り返し等が無限の繰り返しの例として挙げることができるが，これらも多項枝分かれの原因にはならないであろう。

7） ここで詳細を明らかにすることはできないが，同じようなことが他の二重補部構文についても言うことができるであろう。

8） D構造で動詞の姉妹であった要素がS構造では姉妹でなくなると言っても，その要素の痕跡は元の位置に残るのであるから，痕跡も考慮にいれれば，V′から出る枝の数が一本減るわけではない。

9） 格標示以外にも，動詞との姉妹関係を要求する過程は存在するであろう。この点も，今後検討しなくてはならない。

10） ここで当面念頭においているのは構造格であるが，内在格 (inherent Case) がどいう構造関係において付与されるのかも，検討しなくてはならない。しかし，内在格こそは動詞の語彙的特性から決定されてくる格であるから，動詞の語彙エントリー内の動詞を厳密下位範疇化する名詞句，すなわち動詞と姉妹関係にある名詞句に付与されなくてはならないであろう。

11） 普遍文法の段階では確かに AGRo が存在するのであるから，現代英語にはそれが形態的に現れなくても，その存在を否定することはできない，という反論は当然予想される。しかし，それもあくまでも可能性でしかないであろう。

12） ここで伝統的というのは，生成文法の伝統という意味ではない。動詞や前置詞が格支配を行うということが伝統文法よりも昔から言われてきたのであるから，その伝統に従ってという意味である。

13） ECM 構文における不定詞補文主語の格標示も Chomsky (1992, 1994) では，指定辞・主要部の一致による格照合によって行われる。不定詞補文主語は LF で主節の SPEC-AGRo まで繰り上がり，AGRo との一致によって格が照合される。その格素性を名詞は語彙部門から既に持っている，と仮定されている。

14） イタリア語などでは不定詞補文主語と不定詞との間に一致があり，それで主格標示が行われているのであるから，主格標示と時制との間に必然的な関係があるかどうかは疑問ではある。

15） 最小主義プログラムでも，目的語名詞句への θ 標示は主要部・補部関係に基づいて行われるから，この関係を廃止してしまうことはできないであろう。目的語を第二主語 (secondary subject) として動詞の補部ではなくしている Bowers (1994) でさえも，主要部・補部関係を残している。

16） Authier は構造格付与がS構造でなされることを前提としながらも，格が付与される位置自体はD構造から存在する，と考えているようである。格付与のみによって保証される位置がどうしてD構造から存在すると言えるのか，全く不明である。

17） すべての名詞が裸名詞句副詞 (bare NP adverb) の主要部になれるわけではなく，時，場所，

様態などを表す名詞のなかの一部に限られていることは確かである。この問題については，Larson (1985) 参照。しかし，副詞的目的語，同族目的語なども含めると，前置詞を伴わずに副詞的に機能している名詞句は現代英語でもかなりの数に上るし，OEやドイツ語では副詞的属格(adverbial genitive)，副詞的与格 (adverbial dative)，副詞的対格 (adverbial accusative) があるので，さらに多くなるであろう。

18) もちろん，外項は動詞の姉妹であることはなく，これはD構造でVPの指定辞に投射される。したがって，この二つの位置がD構造における項位置になる。

19) 本論ではこの問題を論じることができないが，目的語時制節はS構造までにはV′の外へ出て，動詞の姉妹ではなくなる。

20) 非対称的C統御によるのではなければ，(30)をはじめとする事実をいかにして説明するのかという問題は確かに残る。この問題はJackendoffやNapoliが言うように，線形性(linearity)を抜きにしては語れないであろう。

21) -ly副詞にV′副詞とV″副詞の二種類があることは認めなくてはならないが，両者の識別がどのようにしてなされるのかは不明である。

22) -ly副詞の他に次の例における斜体字の要素も，Nakajimaは非主要範疇と考えている。

(i) a. Mary loves *only* Tom.
　　b. He favors *particuly* young women.
　　c. Mary has read *neither* the book *nor* the review.
　　d. John took *off* his coat.

[Nakajima 1987, p.190]

最初の二つの例の要素は動詞と目的語の間に介在するというよりは，目的語に付加された要素であるという反論もあり得るであろう。しかし，こうした要素は文意を変えずに主語と動詞の間に置くこともできるから，その反論は当たらないとしてNakajimaは退けている。

23) もちろん，直接目的語が複合名詞句 (complex NP) や節で重い時はその限りではなく，V′の外に出ることもあり得る。

24) 様態の副詞はJackendoff (1977) に従って，VPの娘として基底生成されると一応は考えることができる。問題は移動によってV′の外に出る要素である。最大投射は最大投射にのみチョムスキー付加され，主要部は主要部にのみチョムスキー付加されるというChomsky (1986b) の説を尊重するならば，to前置詞句はVPに付加されなくてはならない。その付加が娘付加であれば，(38c)の語順も大きな問題ではない。Nakago (1994) には外置された要素がVPやIPに娘付加されるという主張があり，チョムスキー付加にのみこだわる必要はないように思われる。

25) 「動詞＋不変化詞」を基底形と考える研究としてはChomsky (1957, pp.75-7, 112), Fraser (1974), Legum (1968) などがあり，「不変化詞＋動詞」を基底形と考える研究にはPostal (1974, pp.412-6), Emonds (1972, 1976) などがある。
どちらが正しいとしても，本論の主張を左右することはないであろう。

26) 理屈の上ではPがVの前にくることも考えられる。しかし，VとPとが一つの語彙項目とさえも言われていることから，その可能性は排除される。

27) 次の例から明らかなように，動詞と目的語の間への不変化詞の挿入は本来的には望ましいことではない。

(i) a. I'll look the answer right up, sir.
　　b. He ate his lunch all up.
　　c. You can turn the faucet completely off.
(ii) a. We painted the house (*completely) up red.

b. I'll look (*right) up the answer, sir.

c. He ate (*all) up his lunch.

[Jackendoff 1977, pp.79-80]

理由ははっきりしないが,不変化詞といえども動詞と目的語の間に大きすぎる要素が挿入されてはならないようである。

28) この(45)は文法というよりは文体か,言語運用上の制限であろう。しかも,それは動詞・不変化詞に限ったことではなく,通常は動詞と目的語の間に生じない副詞も,目的語が長いと生じることができる。

(i) a. I believe *sincerely* the mischievous boys who tell lies frequently.

b. Bill saw *quickly* the intention which appeared on her face.

[Nakajiam 1987, p.187]

このような例では,目的語に重名詞句転移 (heavy NP shift) が適用されているのであろう。

29) 次の(48b)が文法的なのは,back が不変化詞というよりは副詞であるからではないかとも考えられる。

30) Johnson (1991) によると,不変化詞は間接目的語も直接目的語も弱い代名詞 (weak pronoun) であるときに,その二つよりも後ろにくることができる。彼の分析では,動詞と不変化詞は,D構造で「動詞+不変化詞」としてV構成素を成している。また,彼の分析では間接目的語と直接目的語とは節的DP(clausal DP)を成し,そのDPは二つの目的語が弱い代名詞の場合にのみ,一つの構成素として不変化詞の左側に転移する。一方,動詞は不変化詞と分かれて上位の主要部へ繰り上がっていく。

31) 問題は,(51a)でも on the table が V′の外に出ていると言えるかどうかである。やはり,その転移が随意的である可能性も残しておきたい。

32) Czepluch 自身は,for 前置詞句はD構造から付加詞であると見なしている。しかし,(58)-(59)における(a)と(b)の文法性の違いは彼が言うほど確かではないし,統語上の位置というよりは意味的であるとも考えられるので,for 前置詞句はD構造では項であると考える。

33) Chomsky (1981, 1986a) が言うように内在格はD構造で付与されるとすると,内在格を付与された名詞句はS構造では動詞と姉妹である必要がなくなる。ドイツ語などでも内在格を付与された名詞句が動詞から離れた所に位置すると言われているが,それは(17)の当然の帰結であろう。

34) 要するに,これはいかなる要素が V′の中にS構造でも留まることができるのかを,本格的に検討する必要があるということである。動詞から構造格を付与される名詞句以外に,V′副詞,不変化詞などもその要素と言えるであろう。

参考文献

Abe, K. (1994) "Differences in Adverbial Behavior between English and French: A Minimalist Approach," Unpublished, Harvard University.

Authier, J. (1991) "V-governed Expletives, Case Theory, and the Projection Principle," *Linguistic Inquiry* 22, 721-40.

Barss, A. and H. Lasnik (1986) "A Note on Anaphora and Double Objects," *Linguistic Inquiry* 17, 347-54.

Bowers, J. (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24, 591-656.

Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1983) *The Grammar Book*. Rowley: Newbury House Publishers.

Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures.* The Hague : Mouton.

Chomsky, N. (1973) "Conditions on Transformations," in Anderson S.R. & P. Kiparsky (eds.) (1973) A Festschrift for Morris Halle. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding.* Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. (1986a) *Knowledge of Language: Its Structure, Origin, and Use.* New York: Praeger.

Chomsky, N. (1986b) *Barriers.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in R. Freidin (ed.) (1991) *Principles and Parameters in Comparative Grammar.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory.* MIT Occasional Papers in Linguistics 1, MIT.

Chomsky, N. (1994) *Bare Phrase Structure.* MIT Occatioanl Papers in Linguistics 5, MIT.

Collins, C. and H. Thrainsson (1993) "Object Shift in Double Object Constructions and the Case Theory," *Papers on Case & Agreement II,* MIT Working Papers in Linguistics 19, 131-74.

Czepluch, H. (1982) "Case Theory and the Dative Construction," *The Linguistic Review* 2, 1-38.

Delahunty, G.P. (1983) "But Sentential Subjects do Exist," Linguistic Analysis 12, 397-98.

Delahunty, G.P. (1994) "The Analysis of English Cleft Sentences," Linguistic Analysis 13, 63-113.

Erteschik-Shir, N. (1979) "Discourse Constraints on Dative Movement," in T. Givon (ed.) (1979) *Syntax and Semantics* 12, New York: Academic Press.

Emonds, J. (1972) "A Reformultion of Certain Syntactic Transformations," in P.S. Peters (ed.) *Goals of Linguistic Theory.* Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall.

Emonds, J. (1976) *Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, Local Transformations.* New York: Academic Press.

Epstein, S. (1987) *Empty Categories and their Antecedents.* Doctoral dissertation, Uconn.

Fraser, J.B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English.* 東京, 大修館.

Green, G. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity.* Bloomimgton: Indiana University Press.

Hudson, R. (1992) "So-called 'Double Object' and Grammatical Relations," *Language* 68, 251-76.

Jackendoff, R. (1977) *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Jackendoff, R. (1990) "On Larson's Treatment of the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 21, 427-56.

Johnson, K. (1991) "Object Positions," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 577-636.

Kayne, R.S. (1984) "Unambiguous Paths," in R.S. Kayne (1984) *Connectedness and Binary Branching.* Dordrecht: Foris.

Kayne, R.S. (1985) "Principles of Particle Constructions," in J. Gueron et al. (eds) (1985) *Grammatical Representation.* Dordrecht: Foris.

Kayne, R.S. (1993) "The Antisymmetry of Syntax," Unpublished, CUNY.

Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-91.

Larson, R. (1990) "Double Objects Revisited: Reply to Jackendof," *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.

Legum, S.E. (1968) "The Verb-Particle Construction in English, Basic or Derived?" *CLS* 4, 50-62.

Mizuno, E. (1994) On Double Object Constructions: From Aspects of Syntactic Behaviors of Objects. Master Thesis, Nanzan University

Mukaiyama, M. (1992) *On the Structure of the Double Object Construction.* Master theis, University of Tokyo.

Nakago, k. (1944) "A Comprehensie Approach towards Extraposition and Predication," *IVY* 27, 107-24.

Nakajima, H. (1987) "On the Case Adjacency Condition," *Linguistic Analysis* 17, 186-99.

Napoli, D.J. (1992) "The Double-Object Construction, Domain Asymmetries, and Linear Precedence," *Linguistics* 30, 837-71.

Napoli, D.J. (1993) *Syntax: Theory and Problems.* Oxford: Oxford University Press.

Oehrle, R.T. (1975) *The Grammatical Status of the English Dative Alternation.* Doctoral dissertation, MIT.

Postal, P. (1974) *On Raising.* Cambridge Mass.: MIT Press.

Postal, P. and G. Pullum (1988) "Expletive Noun Phrases in Subcategorized Positions," *Linguistic Inquiry* 19, 635-70.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Radford, A. (1981) *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory.* London: Cambridge University Press.

Radford, A. (1988) *Transformational Grammar: A First.* Course London: Cambridge University Press.

Sprouse, R.A. (1989) *On the Syntax of the Double Object Construction in Selected Germanic languages.* Ph.D. dissertation, Princeton University.

Stowell, T. (1985) *Origins of Phrase Structure.* Doctoral dissertation, MIT.

Tanaka, H. (1992) "Raising to Object in English, French, and Jsapanese," *English Linguistics* 9, 39-60.

Whitney, R. (1982) "The Syntactic Unity of Wh-Movement and Complex NP Shift," *Linguistic Analysis* 10, 299-319.

Whitney, R. (1983) "The Place of Dative Movement in a Generative Theory," *Linguistic Analysis* 12, 315-22.

Williams, E. (1981) "Argument Structure and Morphology," *The Linguistic Review* 1, 81-114.

Zagona, K.T. (1982) *Government and Proper Government of Verbal Projections.* Doctoral dissertation, University of Washington.